

その二 武田学園創成補述

緑井時代の想い出

大 佐 正 之

私は昭和二十一年日本銀行に入り、半年の研修後、秋に広島支店に配置され、約三年間の実務体験をさせられました。ちょうどこの間、学長ご一家は緑井に仮寓されておられました。当時学千さんは文理大で、急がしく回転するご一家の生活の中にあつて、いろいろな役割を分担されておられました。ここで学長年来の遠大な理想であつた武田学園創設の最終構想が練られ、実践への第一歩をふみ出されたわけです。私は大毛寺から通勤し可部線を利用していたので、途中よく緑井駅で下車し、学長宅へ上り独身の身軽さから時折泊ったりしました。

このような経緯から、学園の胎生期・揺籃期における学長のありのままのお姿に接し、生来の話し好き、世話好きのご性格から、広島の田舎伝来のドメスティックなこと、生々しい政治経済論から宏遠な女子教育論に至る、さまざまレベルのお話を聴くことができました。その一コマ一コマがあまりにも自然体であつたので、まだ社会の現実に疎かった私には非常によい勉強になりました。この時期における学長の抱負は、常々日本の伝統美を重視され、その土壌の上に農村女性の社会意識を近代化させ、日常生活に実践させること、それを学校教育によって実現することに

あったようにみました。このことは終生の理想であり、敗戦という時代の歴史的転換とは直接関係なかったが、それによって一層重要性を痛感されていたように思いました。

明治以降における農村女性生活史は、非常な変革・進歩はみられたものの、それはあくまで内生要因によるものでなかった。個人のうちには封建的色彩がかなり根強く残っていました。そこで、農村女性にとって大事なことは、日本の伝統美を再認識し、新しい観点から生活をより科学的に止揚していくことであるとみられたのではないかと思います。戦前のある文部大臣が「科学する心」という新語を造り、それがジャーナリズムに随分流行したことがあります。ニュアンスは若干違いますが、要するに内生要因として個人の判断と選択においてそういう精神の必要性を強調されたかたのではないかと思います。そういう思想形成の根幹には、広島教育界における永年のご体験を通じての実態観察と、著名な先覚者との接触や、著作等から受けられた感銘などがあったように聞きました。したがって、その言論は抽象的評論家的でなく具体的実践的であり、その姿勢には情熱・自信・厳正が横溢しているところに強い印象を受けました。

当時の日本は、ご承知のように、敗戦によりすべてが虚脱と混乱におちいり、日本経済も壊滅状態にあるとともに戦時財政の矛盾が噴出し始め、インフレの駆け足化が生活を苦しくしていました。インフレの鎮静化を使命とする日銀は、G・H・Qの方針もあり、金融緊急措置令・企業再建整備法等によりかなり広範囲のことをやっていました。

当時広島市は文字通り廃墟と化し七十年間は草も生えないといわれたものですが、早くも企業マインドの力強い息吹きが感じられ、通貨需要も予想外に強く、支店業務は多忙かつ多忙となりました。銀行の仕事は店内が中心ですが、当時は復金融資審査、金融経済調査、貯蓄増強運動、歳入代理店検査などの要件で、県内を中心とした各地へ出向く機会もありました。そのため広島産業界の多くの人と接し、さまざまな話を聴く機会が生まれ、人を観察するよ

い勉強をしました。

なかでも最も強い印象の残っている人は、復金融資（今では夢物語りのような、オート三輪車製造資金）に関連してお会いした東洋工業創業者の松田社長でした。その構想力のスケールが大きいこと、それが緻密な計画性と力強い実践力に裏付けられていることには、多大の感銘を受けました。松田社長にとっては、東洋工業は自らの心であり肉体であり、それに内外に幅広い人間関係を持ち、多くの人の力をうまく結集・消化していく才能は、抜群と思えました。学校経営（私学）と企業経営とは畑がちがいますが、大成する経営体の創始者には、多分に共通する不思議な魅力を感じます。

三十五周年を迎える現在の武田学園は、当時では予想されない程大きく発展しました。しかし特徴的なことは、学長の基本にある理想と信念という本質的なものが変わっていない点だと思えます。つまり、不変の基本式に対し、変数項目は常に弾性値の高い運営能力と幅広い人間関係を駆使してうまく相乗して行く図式を見る感があります。私学の運営には国公立校と異なり、メインの教育に対し経営そのものが一体となって重大な影響を与えるという問題がありません。私学では、教育と経営のバランスを維持することは非常に難しいことで、それを崩して新聞を賑わす世の例は、屢々見かけるところです。企業家にとっても財務政策はなかなかうまくいかないものですが、学長はこの面において、アペイラビリティのきびしい時代でも銀行取引に主導性をもって資金効率の高い要領で克服されてこられました。しかし、大変な苦勞と努力と工夫は重ねておられました。

このような事情から、三十五年の歴史は、学長にとっては坂道を上る機関車のように、武田学園を引っ張ってこられた苦闘史ともいえるでしょう。毎年何回か訪づれ学長とお話していると、その素朴でおだやかな自然体の中に、緑井時代の想い出が、三十五年の歴史を豊かに裏付けし、何か大きな安定感を憶えるわけです。このような印象は、学

園を囲む昔と変わらない美しく穏やかな可部の山河によって、一層色濃きものになっていることも事実です。

(元日本銀行調査役、武田学園理事)